



町民文芸

只見短歌会

五月詠草

大塚栄一

指導

緋の衣今年も取り替へ六地藏を守りてくるる主婦に礼言ふ

五十嵐夏美

馬場 八智

被災者の移り住みしか洗ひ物空き家の窓に多く干さるる

皆川 恒子

ロシア人の妻とその母伴ひて甥の訪れ茶の間賑はふ

古川 英子

ふる里の母亡き今年も筍を義妹掘り起し届けてくれぬ

目黒 富子

同じ桃の実生を育て咲きたればそれぞれ違ふ花の色持つ

渡部ゆき子

鯉幟わが集落に一つのみ立ちて少子化を侘しく見上ぐ

吉津 政枝

贈られし師よりの歌集読み継ぎて挫けしわれの気持ち励ます

齊藤ちひろ

ほつれ毛を撫で上げ赤く沈む目を眺めて太き大根を抜く

渡部ヨリ子

無意識に雑草抜きし手の中の一輪の花を瓶に挿したり

新国 洋子

植ゑ替へし石南花の鉢重からむ棚に上げつつ夫はよろめく

(出 詠 順)

只見俳句会

六月例会

目黒十一

指導

老鶯や妻いくたびか手庇を
遙かなる稜線のもや夏立ちぬ

隆 堂

早苗田に水張る夕べ空焼けて
藪椿やうやく咲いて五月かな

一 穂

桐の花匂う乗車の無人駅

邦 夫

今朝山に採れし蕨を食卓に

敦 子

踊花ままごと遊びの頃をふと

朝な夕な山菜づくしのお膳にて

離農する思案しており朴の花
はつ夏や息やわらかきセラピー犬

笑 羊

水底の夏雲ちらす池の鯉
ひとときまりせし上弦の月涼し

礼

しみじみと畳踏みしむ素足かな
雲の峰人はもくもくペンキ塗る

康 女

小満や娘ヘルパーへおれと言ふ
春蘭や告別式の御使い

邦 男

万緑や小さき部落に空家増え
一升の笹巻結う手変わりなし

リウコ

空梅雨や貞観震災千年忌
水はみなみんなのものよ水芭蕉

恒 夫

げんこつを開いて閉じて藤の花
朴の花ごくあたり前を良しとする

都

蓮浮葉柩の窓に紅を引く
安住のまほろばの郷舞雲雀

吉 児

あと少しもう一本と蕨狩
面長も丸顔もありチュウリップ

洋 子

面長も丸顔もありチュウリップ

洋 子